ウズベキスタンにあるシベリア抑留者に関する モニュメントと「戦争」の記憶継承
―集合的記憶論の視点から―

仲田　由紀美
NAKADA Yukimi

1.　はじめに

本稿では、ウズベキスタンにあるシベリア抑留者に関するモニュメントを通じて、どのような記憶が想起され継承されているのか、記憶の形成過程と継承の現状を明らかにすることを目的としている。モニュメント建立の経緯と、現在両国で想起されている集合的記憶を明らかにし、慰霊碑・記念碑や建造物がどのようにして記憶を表象する「場」となっていったのかを論考する。さらに、記憶が想起され継承される際に生じる記憶の読み替えについても分析する。

調査対象者を、ウズベキスタンにある日本人抑留者に関するモニュメント（慰霊碑、記念碑、後年モニュメント化した劇場）に関わる人々に定め、元抑留者、両国の建立主体者、ウズベキスタンの人々（日本語を学ぶ大学生など）、現地のモニュメントへの訪問や各種メディアなどを通じて記憶を継承したと推測される日本人とした。調査方法は、文献分析のほか、調査対象者へのインタビューとアンケートを実施し、インターネットに投稿されたデータの分析も行っている。

ウズベキスタンでは、墓参や慰霊碑建立を自由に行うことが事実上不可能であった、1990 年のソ連時代から独立後の 2002 年までに、共和国内で確認されている全ての日本人墓地に慰霊碑建立が実現している。これらのモニュメントにどのような思いが込められ、どのような記憶が継承されているのか、さらに想起された記憶を基に形成され、語り継がれている物語（ナラティヴ）が、記憶の継承に果たす可能性と限界についても論考する。

2.　社会学における記憶の概念

(1) 集合的記憶とその研究方法

本稿で扱う記憶は、特定の共同体や集団によってゆるやかに共有される記憶を指

し、心理学や脳科学におけるそれとは区別されるものである。社会学における代表的な記憶理論に、フランスの社会学者、モーリス・アルヴァックスの著書「集合的記憶」（Collective Memory）において概念化された集合的記憶論がある。アルヴァックスは、執筆中の1944年にゲシュタポに捕えられ、翌年ブッフェンワルトの収容所で死去したため一部未完（アルヴァックス、1989：ix、xiv凡例）であるが、この理論は1980年代に注目され始め、記憶論研究の古典的な前提という役割を果たすようになった。この理論と、彼の晩年に書かれた記憶の三部作（翁川、2006：126）は、後にピエール・ノラによって編纂された論文集「記憶の場」[1]や、ヤン・アスマン[2]、アライダ・アスマン[3]らの研究者によって大きく発展した。

集合的記憶論には、記憶の社会性、集団と記憶の関係、その集団と空間的枠組の密接な関係性、そして空間的枠組の中でも物質的枠組の安定性が示されている（粟津、2006：89）。また、集団が記憶を想起する過程において過去を再構成し、その際にしばしば記憶が歪曲される「生きている歴史」（アルヴァックス、1989：66）であるとして、単なる枠としての歴史と集合的記憶を明確に区別した。さらに、記憶は想起する集団によって再構成されるため、その集団の数だけ記憶も複数存在し、それらが競合しながらも共存するという特徴が示されている。社会学者の浜日出夫は、社会学の観点から記憶を研究するためには、「過去が刻まれた空間や物質の配置、またそれらをめぐって営まれる人々の活動の編成を観察することを通して」（浜、2007：7–8）行うとしている。集合的記憶の研究においては、記憶の空間として存在している物質に加え、現存している記憶がどのようにして構築されたのか、その構造や経緯に着目し、記憶を支える人々とその活動を分析することが重要となる。さらに、言葉を発しないモニュメントが表象する意味は、解釈者側にその判断が委ねられてしまうため、伝えたい意図をそのまま伝達することは難しい。ゆえに、想起の際に起こる記憶の読み替えを明確にすることが重要となる。これらを実証することは困難であるが、本稿ではインターネットからの情報をもとに、その一端に触れる分析を試みている。

(2) 集合的記憶―モニュメントとナラティヴ

人は何かを想起する際に空間や物質に依存することがある。「空間のイメージだけが、その安定性のせいで、時を経ても変わることなく、現在の中に過去を再び見出すという幻想をわれわれに与えてくれるのである。しかし、まさにそのようにしてわれわれは、記憶を規定することができるのである。そして空間だけが、老けることもなく、またその部分のどれをも喪失することなく、持続できるほど十分に安定しているのである」（アルヴァックス、1989：207）。ここでは、人間の生命より安定して存在しうる物質的空間が果たす役割を述べている。さらに、記憶が空間とともに時間を超え、特に記念碑などの建造物で使用される石について、「人間よりも永続性を持つ石は集合的記憶の連続性を構成する物質的な素材」（粟津、2006：89）であるため、集合的記憶の想起にはモニュメントなどの物質的枠組に対する依存性が高くなる。また記憶を呼び起こす人は、個人ではなくある集団の観点に立って、その集団が用意している「記憶の枠組」（浜、2007：4）を用いて過去を想起する。非当事者はその空間に触れることで、ある種の記憶を想起することが可能となるのである。またアライダ・アスマンは、

論文「義務とアリバイの間で」(米沢、2009：210–217 所収）において、記憶の内容を強固にし、維持するためには、記憶をコード化、儀式化、物質化、正典化することなしには不可能であると述べている。さらに、「記憶は意味を産出する。そして意味は記憶を安定させる。意味とは常に構成されたもの、事後的に創造され付け加えられた意識」(アスマン、2007：165）であるとし、記憶を安定的に維持するためには「意味」が必要で、それらは想起される際に創造されるものであるとしている。つまり、本稿で取り上げるモニュメント（枠組）と、その枠組を通じて想起された記憶を基に形成される「意味」としてのナラティヴによって、集合的記憶を維持、さらには世代を超えて継承させうることが可能になると考えられる。本稿では、シベリア抑留者に関するモニュメントがどのようにして「記憶の枠組」となったのか、またそれらを通じて想起された記憶を基に形成されたナラティヴが、記憶の継承にどのような機能を発揮しているのか、その可能性と限界について考察する。

3.　ウズベキスタン（中央アジア）におけるシベリア抑留

シベリア抑留の抑留先には、日本ではあまり知られていないが、当時ソ連邦の共和国であった中央アジアのウズベキスタンも含まれていた。ウズベキスタン以外に中央アジアに存在した収容所は、カザフスタン、キルギス、トルクメニスタンの、計 4 カ国とされている（堀江、第三刷 2006：38)。この地域には大きく 4 点の特徴が見られる。第一に死亡率の低さ、第二にノモンハン事件の捕虜との遭遇（「捕虜体験記Ⅴ」、1986：vii)、第三にドイツ人捕虜との交流（「捕虜体験記Ⅴ」、1986：vii)、そして第四の特徴は、第二の特徴にも関連する地域住民との活発な交流である。

1 点目の死亡率の低さについて、死亡者数と収容者数が一番多かったのがカザフスタンの 1,457 名／約 5 万名（味方、2008：39)、次いで、ウズベキスタンで亡くなった 812 名[(4)]／約 2 万名、トルクメニスタン 61 名／不明[(5)]、キルギス 0 名／サナトリアム建設に 125 名[(6)] となっている。シベリア抑留全体における死亡率、約 10 人に 1 人と比較すると割合が低い。1947 年に引揚援護庁から報告された「ソ連引揚者の栄養調査」によると、中央アジアは、他の抑留地に比べて温暖で食糧事情に恵まれていたことが記録されている（131–132)。2 点目の特徴であるノモンハン事件（1939 年）の捕虜について、当時帰国できなかった日本人は約 800 名と推定されているが（ソ連側は 567 名としている)、彼らは主にシベリアや中央アジアの鉱山、鉄道、農場などの労働に従事し、地元の女性と結婚して家族を作った者もいた（秦、1998：81–82)。彼らが現地で良好な関係を築き、優秀な働き手として認められていたことが、その後にウズベキスタンで抑留生活を送った日本人に少なからず影響を与えていたようである。また、現地の女性に幼稚園に連れて行かれ、「日本人とのハーフは優秀であると教えられた」との証言もあった（2013 年 4 月 15 日元抑留者への筆者によるインタビュー)。3 点目のドイツ人捕虜との遭遇について、元抑留者への取材でもドイツ人に関する証言が少なからずあり、中には簡単な日常会話程度のドイツ語を覚えてしまったという証言もある（2013 年 4 月 22 日元抑留者への筆者によるインタビュー)。日本人とドイツ人捕

虜とを比較している証言も見られ、日本人だけで収容所に閉じ込められていた地域とは違った体験をしているようである。4点目の現地人との交流について、一般的なシベリア抑留の体験記には悲惨な体験談が大半を占める中、ウズベキスタンに抑留された人々からは、現地の人々に対する感謝の念も聞かれる。「体調を崩した時にラグマン（野菜や肉をトマトスープで煮込んだうどん）を差し入れされ、体調が回復した」など、交流に関する話は尽きない。現地の人々が日本人と交流を持った要因には次の5点が挙げられる。①宗教・民族的慣習であった「施し」（サダカ）や捕虜に対する同情の念（ソ連時代に宗教的弾圧が加えられても、民族的慣習の中に宗教性を残していた）、②ノモンハンの捕虜の働きがすでに地元で認められていたこと、③地元の成年男子が戦争で大勢亡くなったため、結婚相手や戦死した息子の代わりとして家族形成の対象者として考えられていたこと（「タシケントに残って結婚しなさい」と言われたとの証言もある）、④直接戦争をしていたドイツと比べ日本人とは戦闘を交えたという記憶がなく、同じアジア人として近しい感覚があったこと（風貌が似ている、道徳性などの共通点、日露戦争後の日本政府とイスラーム知識人との関係性など）、⑤宗教弾圧やスターリンの大粛清などに代表されるソ連政府の圧政（宗教弾圧、スターリンの大粛清、被植民地意識など）に不満を持っていたため、ソ連政府の共通の被害者としての日本人抑留者に同情心があった。収容所や労働環境によって差異はあるが、工場や劇場建設では現地の人々と一緒に働くケースもあり、交流は想像以上に行われていたようである。こうした背景が、現在想起されている記憶の形成に影響を与えたと考えられる。

(1) モニュメント1―ナヴォイ劇場とナラティヴ

2012年、日本とウズベキスタンの国交20周年を記念して、ウズベキスタンで日本人抑留者に関する翻訳本が出版された。ウズベキスタン日本友好協会によって出版され、この友好協会の会長が総裁を務めるNBU（National Bank of Uzbekistan）の出資によって完成した。この本の原本「追憶　ナボイ劇場建設の記録―シルクロードに生まれた日本人伝説」（日本ウズベキスタン協会編、2004）は、首都タシケントにある国立のバレエ・オペラ劇場の建設に携わった日本人抑留者による証言集である。日本語の原本に「日本人伝説」[(7)]と題されている通り、彼らがナヴォイ劇場建設の完成に携わった歴史が、後にタシケントで起きた地震をきっかけに伝説となっていった。この証言集をなぜウズベキスタン政府が取り上げて出版するに至ったのか。この問いに関する答えを、ウズベキスタンで語られているナラティヴの形成過程から見出すことができる。筆者が行った現地取材と文献調査で明らかとなった、ナラティヴが形成された要因は次の5点である。①日本人の勤勉性（現地人からの敬意の念）、②現地人からの「施し」を始めとする交流、③大地震でも劇場が倒壊しなかった（日本人の技術力の高さを証明）、④大統領によって劇場外壁にプレートを設置（碑文に「捕虜」という表現をしない）、⑤ソ連政府による破壊命令から日本人墓地を守り現在も継続しているという記憶の存在である（取材では破壊命令の信憑性に関する記憶の競合が見られたが、墓地を守ったという記憶は共通）。

①の勤勉性について、建設現場にいたウズベク人責任者が、「日本人たちは現場で資材をみると『こんなものを使ったら、この建物は200年もしないうちに壊れてしまう

ぞ！』と怒り出した」と証言している。ここには日本人の仕事に対する責任感と精神性が現れており、物作りへの細やかな姿勢とこだわりがこの劇場を通して現地の人々に伝わって、日本に対する肯定的なイメージが形成されていったという（ダダバエフ、2010：90–91）。現地取材でも、建設中から日本人の働きぶりを見るために人々が集まっていたとの証言もあり、完成前から日本人の働きぶりが一定程度認知されていたと推測される。②の「施し」について、「日本人には同情して可哀相と思ってパンやタバコをくれる女性に巡りあうこともあり、大分助けられた」（日本ウズベキスタン協会編、2004：57）という証言や、前述した抑留環境の特徴と同様に、家族構成の一員として認識される抑留者も数多くいたことなど、交流に関する証言が数多く語られている。③の大地震について、劇場の完成から約 20 年後の 1966 年 4 月に、首都タシケントを大地震が襲い、市内の多くの建築物が倒壊してしまったが、ナヴォイ劇場はその姿を保ったまま震災を乗り越えた。この地震をきっかけに、「日本人が建設に携わったから倒れなかった」という噂がどこからともなく広まっていったと推測される。④のプレートの設置は、この劇場がモニュメント化した最も重要な要因のひとつである。ソ連邦が崩壊し、1991 年にウズベキスタン共和国が成立すると、初代大統領に就任したイスラム・カリモフ大統領は、ナヴォイ劇場の壁面に、日本人が建設に携わったという証としてプレートを作成することを決断した[(8)]。プレートを翻訳した、国立タシケント東洋学大学日本科の菅野怜子氏は、「勤務先の大学にウズベキスタン政府から依頼があり、私が翻訳をすることになりました。はじめはロシア語の通り〈日本人捕虜〉と訳しました。しばらくしてから修正の依頼があり、〈捕虜〉から〈強制的に移送された日本国民〉というロシア語に変わりました[(9)]」（2013 年 5 月 23 日菅野氏への筆者によるインタビュー）という。以下、プレートの碑文である（改行箇所と句読点などは原文ママ）

「1945 年から 1946 年にかけて
極東から強制移送された
数百名の日本国民が、
このアリシェル・ナヴォイー名称劇場の
建設に参加し、その完成に貢献した。」

このプレートに刻まれた碑文が、非当事者たちの記憶の想起に大きな影響を与え、①から⑤までの一連の流れが人々に語られるようになったのである。では、5 点目の要因である日本人墓地を守ったという記憶がなぜ生まれたのか。この地における墓地整備とモニュメント建立事業の経緯を知ることで、その記憶の断片に触れることができる。

(2) モニュメント 2―日本人墓地整備事業と慰霊碑・記念碑

ソ連時代に墓参や墓地整備を行うことは非常に困難であったが、ウズベキスタンでは、1990 年のソ連崩壊以前に日本人墓地の整備と慰霊碑建立事業を受け入れ、現在までに慰霊碑を 13 基（1990 年 1 基、1995 年 2 基、2002 年 10 基）、記念碑 5 基（2002 年 4 基、2004 年 1 基）を建立している。首都タシケントのヤッカサライ墓地の中にある

日本人墓地は、ガイドブックなどで紹介されて観光地化され、現地のガイドなどによって、ウズベキスタンの人々が日本人を手厚く葬ったことが日本人観光客に伝えられている。では、これらのモニュメントが建立されたのはなぜなのか。ウズベキスタンで最も早く建立された慰霊碑であり、その後のモニュメント建立の土台となった、このヤッカサライ墓地にある日本人墓地に焦点をあて、それらに込められた記憶の一端を明らかにする。

この墓地整備・慰霊碑建立事業の特徴は次の3点に集約される。1点目は、日本のNGOが主体となって建立していること、2点目は、事業の障害となった問題点から垣間見える当時の社会情勢、3点目は、慰霊碑の形態と碑文である。

1点目の民間主導の建立事業について、冷戦時代は、日ソの政府機関がこれらの問題に関して消極的だったという背景がある。「シベリア抑留問題を掘り起こすと日ソ双方に重い責任が生じるため、戦後一貫してこれをタブー視して、深い関わりを避けてきた結果によるものだ。こうした国家同士の厚い壁に阻まれて、日本側の手元には全抑留者や抑留中の死亡者の完全な名簿がないうえ、遺骨の対日送還は実現せず、墓参もごく限られた地域しか認められなかった」(白井、1995：257)。こういった当時の政治情勢から、これらの問題に関しては、民間の団体が独自に実行するようになっていったのである。

この事業の中核を担ってきたのは福島県にあるNGOだった。福島県ウズベキスタン文化経済交流協会は、1979年から交流を続け（当時は日ソ親善協会福島県支部)、ウズベキスタンの日本人墓地整備とモニュメント建立事業の先駆者的存在である。しかし、1983年に日本人墓地が発見されるまで、ウズベキスタンが抑留地であったことを知らず、ウズベク側から語られることもなかったという（福島県ウズベキスタン文化経済交流協会、2000：130)。発見のきっかけは、遺族からの問い合わせだった。1983年に結成された訪問団が地元のマスコミに取り上げられ、それを知った福島県在住の遺族から、「タシケントの日本人墓地に兄さんの墓地があるので調べてほしい」という要望を受けた。現地の窓口だった、ウズベキスタン対外友好文化交流団体連合会（通称・対文連）に問い合わせをしたところ、日本人墓地の存在を伝えられたのである。しかし墓地は荒廃し、誰が埋葬されているのか全く分からない状態だったという（福島県ウズベキスタン文化経済交流協会、2000：130)。帰国後、県選出の国会議員に依頼して、タシケントとアングレンにある墓地の埋葬者名簿を入手し、タシケントの日本人墓地に慰霊碑を建立することを決意した。1987年の訪問の際、対文連に「二度と悲惨な戦争の犠牲者を出さないために、タシケントに鎮魂の碑を建立したいので協力してほしい」と要請すると、対文連の議長であったテシャバエフ氏が、「実現するよう努力します」と承諾し、墓地整備と慰霊碑建立事業が開始した（福島県ウズベキスタン文化経済交流協会、2000：132)。その後、両国の協力者と信頼関係を築き、そして共に多くの障害を乗り越え、墓地発見から7年後の1990年5月に除幕式が行われた。

では、事業におけるその障害とはどのようなものだったのか。そのひとつに、前述した政治的背景による日ソ両国の非協力的な態度がある。当時のソ連大使館に、交流協会の宍戸利夫理事長がこれらの事業への協力を打診すると、「ソ連としては、日本人墓地の問題は慎重に扱いたいこと、特に墓地問題で反ソ的な日本人の感情が表面化す

写真　左：ナヴォイ劇場（筆者撮影）、中：劇場建設風景（ウズベキスタンの日本人史料館展示物）、右：ヤッカサライ墓地の慰霊碑（筆者撮影）

ることを懸念し、モスクワが反対しているので賛成できない」と不承諾の回答があったという（2013 年 11 月 26 日宍戸理事長への筆者によるインタビュー）。また、日本側でも厚生省（当時）に働きかけを行ったが全く興味を示さなかったため、資金調達[(10)] など、自分たちの組織だけで事業を実施しなければならなかった。さらに、長年信頼関係を築いてきた協力者間でも問題が起きた。事業の中心的役割を担った宍戸理事長にとって最も印象的であったのが、慰霊碑に刻む碑文の問題である。これは 3 点目の特徴にも関連するが、この「鎮魂の碑」に刻んだ碑文の決定は順調には進まなかった。「永遠の平和と友好不戦の誓い」という碑文を刻みたいという意向をテシャバエフ氏に提示すると、「不戦という文字は刻んでほしくない」との要望が伝えられた。当時のソ連は、ウズベキスタンに隣接するアフガニスタンと緊張状態にあったため、簡単には合意に至らなかった。しばらく押し問答が続き、宍戸理事長から「ウズベキスタンは日本と戦争をするつもりなのか」と詰め寄る場面もあったという。しかし最後には、両国が将来戦争することはないことを確認し合い、両国間において不戦の誓いが交わされたのである。この「不戦の誓い」という文言は、独立後の 1995 年 10 月 1 日、「世界大戦終結 50 周年記念」として、アングレン市で除幕式が行われた慰霊碑にも刻まれている。この時に、1990 年に整備したタシケントのヤッカサライ墓地内を再整備して、13 墓地名と埋葬者数を刻んだモニュメントを建立し、ウズベキスタン内に現存する 11 カ所の墓地の土と、消滅した 2 カ所の墓地付近の土を採取して献納をしている[(11)]。この墓地に訪問することで、ウズベキスタン国内で確認されている全墓地を想起することが可能となった。また、ヤッカサライ墓地の慰霊碑は、日本の方角に向かって合掌しているようにつくられている。この方角についてはヤッカサライのみだが、その後に建立される慰霊碑はすべてこの合掌スタイルになっている。2000 年以降に建立された記念碑は、亡くなった方だけでなく、抑留されたすべての人々の功績を記念するもので、表にはその地における日本人の詳細な功績を日本語で刻み、裏にはウズベク語で書かれている。この碑の特徴は、具体的な労働内容が記載されているところにあり、ここを訪れた人々が、日本人抑留者の体験の一端を想起することが可能となっている。

この記念碑建立のきっかけは、元抑留者たちの訴えであった。アングレンの墓地が整備されてから 5 年後の 2000 年、整備されていない日本人墓地を訪問した、宮崎県の元抑留者たちからの懇願を受け、当時の大使であった中山恭子氏が中心となって、墓地整備と建立事業が行われた。中山氏は、建立事業の経験者であった宍戸理事長に協

力を要請して全国規模の事業を展開し、2002年に大々的な除幕式をウズベキスタンで行っている[12]。ソ連時代から行われた墓地整備とモニュメント建立事業が、両国の友好関係の発展に寄与したことは間違いない。このことは、現在モニュメントが日ウズ友好の象徴となっていることからも推測できる。そしてこれらの事業が、現地の人々の心の中に「日本人を守った」という記憶を形成した一要因となったと考えられる。

4. 記憶の継承と読み替え

日本人のツアーガイドとしても活動する機会の多い、国立タシケント東洋学大学で日本語を学ぶ学生たち11名にインタビューとアンケートを実施（アンケートは事前に配布し、2013年5月23日に筆者によるインタビューを実施）し、彼らがそれらの記憶をどのように解釈してどう語っているのかを調査した。ウズベキスタンではガイドになるために国立の観光所での受講が義務付けられており、そこで、日本人墓地やナヴォイ劇場のナラティヴと同様の内容について学習していたことが確認された。これらの証言から、ウズベキスタンにおいて統一した集合的記憶が確立していることがわかる。もう一点、この調査で得られた重要な意見は、11名中10名が、日本語を学ぶ以前にはこのナラティヴについて全く知らなかったということである。このナラティヴを支える集団は、日本人が抑留された地域の主に高齢者と、日本語学習者やビジネスなどで日本との関係を構築している人々であり、若者の中には全く知らずに過ごしている人も少なくないという。記憶が忘却されつつあるのか、また別の要因があるのかどうか、今後の詳細な調査が必要である。

他方、日本では、現地を訪問した人々のみならず、テレビ[13]やインターネットの動画配信、関連書籍などを通じて、これらの記憶について知った人々が、インターネット上のブログやホームページで様々な思いを綴っている。検索サイトGoogleで、「シベリア抑留　日本人墓地　ウズベキスタン」で検索して抽出したデータ[14]によると、多かった記述の上位5点は、①シベリア抑留の歴史に関する記述（55.7%）、②ナヴォイ劇場：大地震と日本人の技術力（47.7%）、③日本人の勤勉性（45.1%）、④実際に現地を訪問した人（36.6%）、⑤ウズベキスタンの親日感情に関する記述（26.4%）となった。②、③、⑤は、ナヴォイ劇場のナラティヴと合致するもので、日本人抑留者に関する記憶は、このナラティヴによって支えられていることが確認できる。しかし、抑留者の人々の記憶にあるノモンハン捕虜との遭遇（0.4%、55番目）や、建立者側が碑文に込めた「不戦」に通ずる、戦争を二度と繰り返さないという明確な記述が0.9%（43番目）にとどまっている。シベリア抑留の歴史を想起しているにもかかわらず非常に低い。これは、英雄伝説的美談がナラティヴの中心となっていることに要因の一つがあると思われる。だが、元抑留者への思い（感謝・供養の念、敬意、切ないなど）（20.9%）が全体の10番目に多く、改めて記述をしなくても戦争に反対することは当然であるという真意もあるだろう。また、碑文に刻まれているにもかかわらず、死亡者数の不確実さや、少数意見ではあるがヤッカサライ墓地の碑を「福島県人慰霊碑」と認識し、建立事業を「ソ連崩壊後に国ごとに県の団体を割り当てた」、「墓地を整備

し慰霊碑を建立したのは大統領・または日本政府」との事実誤認もみられている。さらに興味深いのは、ウズキスタンの親日感情に呼応するように、「日本人として誇りに思う」という愛国心や民族意識（14.5%、14 番目）に関する記述も目立っていることである。「（抑留者に）恥じない生き方をしたい」などの記述を含め、現在日本で継承されつつある記憶は、日本人抑留者を称える美談が中心となっていることには間違いないと言えるだろう。

5.　おわりに―モニュメントを通じた記憶の継承、ナラティヴの可能性と限界

調査の結果、ウズベキスタンにある日本人抑留者に関するモニュメントが人々の関心を集め、それらにまつわる友好的な記憶が両国で共有されつつあることが確認された。ナヴォイ劇場に加え、ソ連時代から建立されてきた日本人墓地にある慰霊碑と記念碑も人々の関心を呼び、特に首都タシケント市のヤッカサライにある墓地や、同市内にある記念碑は観光地化され、ガイドブックなどでも紹介されている。そして、ウズベキスタンで活動する日本人職員や観光客がそれらの「場」を訪れ、現地ガイドなどを通じてその記憶に触れている。また、現地へ訪問していない人々にも、インターネット、書籍、マスメディアなどを通じて、これらの記憶が広まりつつある。記憶が現在の、特に政治情勢に強い影響を受けるため、友好的なナラティヴを中心として語り継がれているという現状は、両国の関係が比較的良好であることを物語っている。またこのナラティヴには、日本側では日本人の勤勉性と卓越した技術力を褒め称え、ウズベク側では抑留者に施し、日本人墓地を現在まで継続して守ってきたというメッセージが含まれていることから、両国民の愛国心をも想起させる効果があることも確認された。しかし、「戦争」の記憶の継承という側面からインターネットの調査結果をみると、シベリア抑留に関する一定程度の歴史は想起されているが、建立者側が希求する「戦争を二度と繰り返さない」という明確な記述が非常に少ない。また、事実誤認や記憶の読み替えも起きている。ナヴォイ劇場のナラティヴには、記憶に「意味」づけをする機能があり、人々の記憶にそれらを定着させ、世代を超える記憶継承の可能性を高める効果があることが確認できた。だが、ナラティヴで語られていないシベリア抑留の悲惨な側面（帰国後の差別、ノモンハン捕虜の存在、長年にわたる補償闘争など）や、両国の慰霊碑・記念碑建立主体者が重視する、両国が不戦を誓ったという記憶は、継承者側の記憶から抜け落ちつつある。研究結果が示すように、ナラティヴは記憶継承の万能な道具ではない。言語表現の限界や語る側の心象の差異、さらに想起する集団によって解釈の誤差が生じるため、モニュメントの建立者が希望する思いを正確に継承させることは困難である。この問いには、今後も引き続き向き合う必要があるだろう。

本研究の課題には、資料の分析と取材対象に関する問題、ドイツと日本との比較の必要性がある。前者に関しては、インターネットで得た情報を筆者が任意で選択し分類していること、時間とともに刻々と情報が更新されていることから、今後も引き続き分析と検証が必要である。また、ウズベキスタンの取材対象者は、日本と少なから

ず関係を持つ人々が中心であったため、日本人である筆者に対して記憶を語りきれなかった可能性も考えられる。後者の課題は、日本と同じ敗戦国であり、ウズベキスタンにも複数存在したドイツ人捕虜の墓地調査の必要性である。ドイツ人捕虜の墓地もウズベキスタン国内にいくつか存在しているが、現地のあるガイドによると、ドイツ人は日本人以上の観光客数を有しているにもかかわらず、墓地をあまり訪問しないという。それはなぜなのか。「戦争」の記憶を表象しうる、ドイツ人墓地を通じて想起されている記憶を明らかにし、本研究で得た日本人の事例と比較することによって、記憶の継承に関する考察をさらに深化させることが可能になると考える。以上の反省点を踏まえ、今後も本研究を発展させていきたい。

■註

(1) 日本語版（谷川稔監訳、「記憶の場―フランス国民意識の文化＝社会史」（全三巻）、岩波書店）は、第一巻「対立」(2002)、第二巻「統合」(2003)、第三巻「模索」(2003）で構成されている。

(2) Jan Assmann and John Czaplicka, 1995, Collective Memory and Cultural Identity, *New German Critique*, no.65

(3) アライダ・アスマン、2007、「想起の空間―文化的記憶の形態と変遷」水声社

(4) 死亡者数はウズベキスタン対外友好協会連合会提供資料より。

(5) クラスノボトスク「望郷の丘」日本人墓地建設委員会、1997、「トルクメン共和国クラスノボトスク第四十四捕虜収容所」(7 頁)

(6) 愛知県国際交流協会、2009、「わたしたちの地球と未来　キルギス共和国」愛知県（17 頁）

(7) 日本人が工事に加わった時には既に基礎工事は終了していたとして、この「伝説」に異論を唱える人もいる（胡口靖夫、2009、「シルクロードの〈青の都〉に暮らす」同時代社：45–46)。また、元抑留者の中にも「ナボイ劇場の建設は日本人が〈協力〉したのであり、日本人が鼻を高くすることではない」とし、日本人の技術が褒め称えられるのであるとすれば、「現在でも使用されている（水力）発電所は、日本の技術が活かされている」と語っている。

(8) プレートは 2 枚設置され、ウズベク語、英語、ロシア語、日本語で書かれている。

(9) この大統領の発言について、当時の日本大使・孫崎享氏はこう記している。「決して日本人捕虜という表記は使うな。このプレートは永遠に続く。日本とウズベキスタンは一度も戦争をしたことがない。そこに『捕虜』があるはずがない」(日本ウズベキスタン協会編、2004：13)。

(10) 建立に関する費用はすべて募金で賄われた。福島県内で 5,242,845 円、県外 1,745,500 円の募金が集まった（福島県ウズベキスタン文化経済交流協会、2000：151)。

(11) 実際には「№ 8043 第 387 収容所フェルガナ地区」と「№ 8045 第 400 及び 17 労働隊墓地タシケント地区」が都市計画で消滅している（2013 年 12 月 26 日宍戸理事長への筆者によるインタビュー)。

(12) この時、募金の一部で桜の苗木を 27 種類・1,300 本、梅と桃の苗木 100 本購入し植樹した。ウズベク側からの要請でタシケントの中央公園にも植樹し、大統領官邸、日本大使館、対外経済関係省、ナヴォイ劇場、日本庭園にも植樹した（中山、2005：231)。

(13) 1996 年に TBS 報道特集「知られざる親日国・ウズベキスタン」、2000 年に NHK で「わが青春のナヴォイ劇場～日本人が建てたウズベキスタンのオペラ座～」が放映されている。

(14) Google で、2013 年 3 月時点でヒットした 14,100 件のうち、的確な検索結果を表示するために自動的に削除されたもの、ウズベキスタンの日本人墓地に関する記述がないもの、

Wikipedia や辞書の類を削除した。また、同一人物と思われる内容の違う 2 種類以上のものは 1 件とし、内容はすべてカウント。こうして 235 件に絞った母数から、記述内容を 55 項目に分類した（検索内容やカウント方法、分析項目内容は、筆者の任意である）。

■引用文献

粟津賢太、2006、「集合的記憶のポリティクス　沖縄におけるアジア太平洋戦争後の戦没者記念施設を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告書 126 集』国立歴史民俗博物館

アライダ・アスマン、2007、『想起の空間―文化的記憶の形態と変遷』水声社

翁川景子、2006,「記憶の共有可能性　M. アルヴァックスにおける集合的記憶論の再構成」『ソシオロジスト : 武蔵大学 : 武蔵社会学論集 8』武蔵大学

厚生省社会・援護局援護 50 年史編集委員会、1997、『援護 50 年史』ぎょうせい

ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会、1986、『捕虜体験記Ⅴ中央アジア篇』ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会発行

白井久也、1995、『ドキュメントシベリア抑留　斎藤六郎の軌跡』岩波書店

ティムール・ダダバエフ、2010、『記憶の中のソ連　中央アジアの人々の生きた社会主義時代』筑波大学出版会

中山恭子、2005、『ウズベキスタンの桜』KTC 中央出版

日本ウズベキスタン協会編集、2004、『追憶　ナボイ劇場建設の記録―シルクロードに生まれた日本人伝説』NPO 日本ウズベキスタン協会

秦郁彦、1998、『日本人捕虜　白村江からシベリア抑留まで（上下）』原書房

浜日出夫、2007、「記憶の社会学・序説」『哲学第 117 集』慶応義塾大学

福島県ウズベキスタン文化経済交流協会、2000、『ウズベキスタン友好 20 年の歩み』民報印刷（発行所：宍戸利夫理事長）

堀江則雄、2006（第三刷）、『シベリア抑留　いま問われるもの』ユーラシア研究所、東洋書店

味方俊介、2008、『カザフスタンにおける日本人抑留』ユーラシア研究所、東洋書店

モーリス・アルヴァックス、1989、『集合的記憶』行路社

米沢薫、2009、『記念碑論争　ナチスの過去をめぐる共同想起の闘い［1988～2006 年］』社会評論社